



北海道新時代 #01

社会資本整備の現場を見て学ぶ （新採職員と大学院生の合同見学から）

国土交通省北海道開発局
札幌開発建設部技術企画課

国土交通省北海道開発局札幌開発建設部の新規採用職員と、北海道大学公共政策大学院で小磯修二特任教授から社会資本整備論を学ぶ院生の合同現場見学会が、2015年6月13日に実施されました。これは14年から両者の連携で始まった見学会です。

札幌開発建設部の新採職員は配属された部署の現場を見る機会がありますが、違う部署の現場を見学する機会はありません。また、北大の院生も社会資本整備の意義や仕組みについての講義は受けていますが、現場を見学する機会やそこで働く人たちの生の声を聞く機会はほとんどありません。そこで、社会資本整備の現場を見学することで地域の実情を肌で感じ、視野を広げるきっかけにしてみよう、双方にとってプラスになることから始めました。

車中では各事業の概要を学ぶ

この日の訪問先は長沼町にある国道274号沿いの「道の駅マオイの丘公園」、同町及び千歳市内で工事が進んでいる「道央圏連絡道路」の泉郷道路、夕張市にある「夕張シューパロダム」です。この日は新採職員13名と院生12名が参加し、バスでは両者が隣り合わせになるように席を配置。社会人1年生と院生が親しく話せるように配慮しました。

移動の車中では札幌開発建設部の各担当職員から、北海道総合開発計画と社会資本整備の効果、北海道内で国が実施する河川事業、道路事業、空港整備事業や農業農村整備事業などの説明があり、今回見学できな



バス中での自己紹介

い事業の概要についても学びました。

中でも北海道総合開発計画と社会資本整備の効果については、交通ネットワーク整備による人流・物流の時間短縮や道内港湾における取扱貨物量の変化、治水対策によって石狩川流域が食料の一大生産地に成長したデータなどが示され、院生からは「社会資本整備のストック効果が実感できました」という声が聞かれました。

道央圏連絡道路泉郷道路の工事現場

道の駅マオイの丘公園では、センターハウスの屋上から長沼町周辺の地形や農地の様子などを各自で確認。その後、一行が向かったのは道央圏連絡道路（国道337号）の泉郷道路の工事現場です。道央圏連絡道路は、千歳市を起点として長沼町など3市3町を経由して小樽市に至る延長約80kmの地域高規格道路です。



巨大なくい打ちを間近で見学

道都・札幌市の交通渋滞の緩和のほか、新千歳空港や苫小牧港などを利用する物流交通を向上させ、農業や観光など北海道の産業活性化に寄与することが期待されている道路です。この中の泉郷道路は、北海道横断自動車道千歳東ICから南長沼ランプ（国道274号）に至る区間です。泉郷道路の区間に並行する国道337号では、出合い頭や追突などの交通事故が発生しており、完成すれば道路交通の安全性向上にも役立ちます。

座学で道路全般のフローとストック効果や道央圏連絡道路の概要について学び、工事現場に向かいました。見学した現場は、農業用水路上に道路を敷設するために架ける門型カルバート工の基礎のくい打ち工事です。この工事では地下30mまでくいを打ち込むため、3D図面などを用いて地下の見えない部分を視覚化して管理しています。また、AR（Augmented Realityの略）と呼ばれる現実の風景に工事計画の情報を重ね合わせて表示する技術も導入され、品質管理に役立っています。タブレット端末に表示されたARと実際の現場を見比べて、完成後のイメージを実感している参加者の姿が印象的でした。

道路事務所に配属された職員は「自分が関わっている道央圏連絡道路区間は見ていますが、門型カルバートの工事は初めてです。これだけ大規模にくいを打つ現場は初めてだったので圧倒されました」と言います。また、大学院で研究生として学んでいる中国人留学生は「中国の道路整備は都市部が中心で、地方の道路は



タブレット端末でARを確認

ほとんど改良されていません。交通安全を意識した道路整備に感心しました」と母国との違いを語ってくれました。

完成間もない夕張スーパーダム

最後に向かったのは、15年3月に完成したばかりの夕張スーパーダムです。これは1981年8月の石狩川大洪水が契機となって、それまで農業用と発電を目的に使われていた大夕張ダムの機能向上を図った、ダムの再開発ともいえるユニークな事業です。かんがい用水や発電に加えて、洪水調節や流水の正常な機能維持、さらに水道用水としても使われており、その水の恵みは夕張市をはじめ、札幌市、江別市、石狩市、南幌町、由仁町、長沼町、栗山町など8市6町1村に及ぶ、道央圏の重要なダムの一つです。また、国が進める目的の異なる二つの事業（治水とかんがい）を、河川管理者（国土交通省）と土地改良事業者（農林水産省）が一緒に連携して実施したことは、開発局という横断的な組織だからこそ可能となった、全国的にも珍しい事例です。

管理棟でスーパーダムの概要を学んだ後、一般の人が普段立ち入れないダム本体の内部を特別に見学しました。ダムの内部を初めて見学する人がほとんどで、ダムの水を川に流したり、止めたりする装置などを珍しそうに見ていました。最後はダムの上部に上がり、^{たんすい}湛水の様子やダムからの眺めを楽しみました。

スーパーダムの大きさは大夕張ダムの1.5倍、スーパーパロ湖の総貯水量は約5倍となっていますが、広報室に勤務する職員は「完成したスーパーダムの壮大さを実感しました。貴重な鉄道遺産の三弦橋*が沈んでいることも聞いているので、とてもいい勉強になりました」と言います。



湛水の様子を見学

帰路の車中では活発な質疑応答

札幌に戻る車中では、質疑応答の時間が設けられました。院生からは公園などが整備されている恵庭市の漁川ダムを例に挙げ、スーパーダムの観光資源としての活用策について質問が出されました。これに対して事業担当者からは、地元の市町村が主体となってダムやダム湖という資源を活用していること、現在スーパーパロダムでも議論が進んでいるという回答がありました。また、老朽化が進む道路が増えていく中で今後の維持更新の考え方についての質問には、複数年や複数自治体でまとめて発注するなどの維持管理の効率化を進めている例などが説明され、参加者たちは熱心に耳を傾け、充実した一日を終えました。



スーパーパロダムを背景に全員で記念撮影

※ 三弦橋

ダムに影響がないことが確認され、貯水池に残された。水利用や降雨の状況により、数年に一度しか水面上に現れないと予測されている。